

IUFRO-J NEWS

No. 3

IUFRO 会長 Dr. W. Liese の来日によせて

IUFRO-J No. 2 に報ぜられておるように、IUFRO 会長、Dr. Liese が本年4月2～6日来日され、ときをあわせて京大で開催されていた木材学会(4月4日、p.m. 1.30-2.00)で“Contribution to the Anatomy of Bamboo”の演題で講演された。また木材学会懇親会にも出席され、次期 IUFRO 日本大会について協力を要請された。

Dr. Liese は Institut für Holzbiologie und Holzschutz der Bundesforschungsanstalt für Forst-und Holzwirtschaft および Hamburg 大学の教授で、木材の微生物劣化および木材組織学の権威で、日本的には林産学分野に属しているが、本人は Forester であることを強調しており、林業一般の分野にも通暁されている。

今回木材学会で講演されたタケについてはとくに興味をもっておられ、Wood Sci. and Technol., 5, 290 (1971) に“On the Anatomy of Asian Bamboos, with Special Reference to their Vascular Bundles”同じく 10, 231(1976)に“On the Fine Structure of Bamboo Fibres”を報告されている。

京都滞在中は好天に恵まれて丸山公園の夜桜見物や市

内観光もさることながら、日本におけるタケの研究の権威者、京大名誉教授、上田弘一郎先生と会われ、先生のご案内で京大演習林、上賀茂試験地でタケの見本林や、東南アジア一帯のタケのコレクションを見学された。

次いでその日の夕方、堀川会館で開かれた IUFRO-J による 歓迎レセプションでも、次期日本大会がアジアで初めての開催であること、東南アジアにおけるタケ類の資源的、林業の見地からみても是非タケについての session を企画に含めてもらいたいと語っておられた。筆者が Dr. Liese と初めてお会いしたのは1969年シアトルでの国際木材化学シンポジウムに出席した折りで、そのさい Weyerhaeuser Co. 主催の木材についての Research seminar で、Prof. McCarthy, Sarkanen (ワシントン大)、Prof. Adler (スウェーデン、チャルマース工大)、Dr. Liese とともに講師として招かれたときである。今、そのときの Dr. Liese の講演が、上記、Wood Sci. and Technol., 5, 290 (1971) の内容であったことを思い出している。そのご、1975年にハンブルク大学でのリグニンのセミナーの際再会し、1976年第5回国際木材科学アカデミー総会(コペンハーゲン)、第16回 IUFRO 大会(オスロ)でもお会いし親交の間柄である。

Dr. Liese は人柄、包容力ともに優れ、林業、林産関係の研究集会、国際事業などの優れたオルガナイザーであり、IUFRO 会長はまさに適任で、今後大いに活躍されるものと期待されている。写真は、第5回国際木材科学アカデミー(コペンハーゲン)会場で筆者の撮ったスナップ右側が Dr. Liese である。

(京大木研 樋口隆昌)



Dr. W. Liese 林野庁長官を訪問

オーストラリア、キャンベラで開催された第3回林木育種研究会に出席された Dr. W. Liese 会長は4月5日午後林野庁長官を訪問し、つぎのような会話が行われた。(要旨)

長官：来日の機会に、

会長：20年前と10年前、それに今回で3回目です。このたびは全見の機会と次期大会をお引き受けいただき厚くお礼を申しあげる。

長官：IUFRO に関して詳しく伺いたいが、国会開会中であり十分時間が割けなくて申し訳ない、林野庁としても、これほど大規模な国際会議は初めてなので、今から準備を進めていますが、今後ともよろしくご指導願います。

会長：私は日本大会の成功を確信している、というのは数年前日本で開催された林業関係の会議が大成功であったことを聞いているからです。

最近 IUFRO の大会を欧州以外の国でもやるようになったが、米国大会でも大きな成果をあげることが出

来ました。このたびのアジア開催では、日本林業の発展ぶりをみても成功することは間違いありません。

IUFRO の成果は、日本林業の今後のいっそうの発展に寄与するものと思います。

長官：日本の林業は貴国の林業を範として発展したのですが、今日森林に対する要望が多目的になり林業もその要請に対応していかなければなりません。我が国と貴国ともますます密接な関係を保っていききたいものです。

会長：森林の多目的利用という点では、全く同様ですが、この方面の研究者、技術者は少ないようです。私も25年来竹の研究を行っているが、今日その用途の広いのに驚いている次第です。

今回の IUFRO 大会も佐藤教授が副会長になっているので大変心強く思っています。

長官：ご来庁を厚くお礼申し上げます。

(文責・事務局)

日本大会のシンボルテーマの募集

すでに会員の方はご承知のことと思いますが IUFRO-J では、オーストラリア大会で取りあげられたようなシンボルテーマ、“Forestry in a World of Limited Resources”を、日本開催の場合にも是非とも選定したいと関係者間で相談しています。

このテーマも開催当時の諸状況に対応した適切なものを選定することが望ましいが、現状ではどのようなものが考えられるか、会員のご意見を伺うよう公募を計画しましたので、次の要領で事務局へお寄せ下さるようお願いいたします。

- (1) シンボルテーマ
- (2) シンボルテーマ選定の背景
- (3) シンボルテーマ選定のヒントなど

同エクスカージョン (EXC.) の 視察候補地の調査について

日本大会における EXC. の選定については、コースの数、期間、専門別、地域別、コース当りの人員、サービス条件など種々検討すべき問題があるが、当面つぎのような事項を基本としてコース設定の草案を作成したいと

考え、何処にどのような視察(適地)候補地があるかどうか会員のご意見を伺うこととなりましたので、シンボルテーマ同様ご協力下さい。

●コース設定の基本となる事項

(1) 専門別とコース数(案)

造林(含育種)	3コース
森林保護(含鳥獣)	1~2コース
森林機械	1コース
森林土壌(含肥培)	1コース
防災	1コース
林業経営	2コース
林産	1~2コース
林業一般	2コース
コンgresコース	1コース

(2) コース当り人員：1単位40~50人(大型バス1~2台)

(3) 乗物：航空機、新幹線を主体とした列車、バス

(4) 期間：3泊4日~5泊6日

(5) 時期：現在9月下旬~10月上旬を予定

(6) その他の条件

① 視察箇所には大型バス乗入れ可能のこと。

② コース単位の上限80名前後。

第17回日本大会開催のための組織体制づくり

昨年6月第16回ノルウェー大会で日本開催が正式に決定して以来、林野庁・林試を中心として日本大会への受入準備が具体的に進捗しはじめた。

それには、まず大会受入れのための組織体制を確立することが先決で、別表のような体制が協議想定され、7月6日に林野庁・林試を主体とした組織委員会と事務局が設置された。さらに引きつづいて大会の基本方針を決定する最高機関としての日本大会協議会の設立、あわせて財源等の確保をはかるための日本大会協会の設置が進められている。

さきに発足した組織委員会は、実行計画の決定機関といえるもので、そのメンバーとして委員長に指導部長、副委員長に林野から林政課長、林試から調査部長、委員に林野庁側で林産、計画、造林、業務、経理、研究普及の各課長、林試側では全部長によって構成されている。

組織事務局は実行計画の立案、予算編成、実行計画による実施など具体的執行推進機関ともいえるもので、その構成は委員長に研究普及課長、副委員長に林試の海外林業調査科長、委員に林野側から林政、林産、計画、造林、研究普及、業務、経理の各総括補佐、林政課広報官、国協係長、計画課の坂本、青柳各係長と普及課の研究担当補佐、林試側から研究協力、技術情報各室長と山根、有光各室長によるメンバーで、さらに IUFRO-J メンバーの助言を得ることになっている。

日本大会協議会、日本協会の設立については、現在組織事務局、林団懇を中心に構成メンバーの検討に入り、近々設置の運びとなる予定である。

組織委員会ですでに決定されたことは、今秋(10月)カナダで開催される第2回理事会への提案としての日本大会の開催場所、会場、会期、エクスカッション、シンボルテーマ、予算等の案件が協議され同委員会としての結論を得ている。

すなわち、会期(時期と期間)については、参加者の推定(1,200人)気象条件、会場・宿泊施設の確保の難易、交通事情等を配慮の結果、9月下旬～10月上旬の12日～13日間とする。

開催地については、必要会議室、会場の施設とくに通訳、国際会議のキャリア、会議室のまとまり具合、経費、交通の便、準備・設営のための便、環境、宿泊施設の確保と難易等を検討の結果、京都、東京、筑波を候補地として調査を進めている。

シンボルテーマについては、前述のとおり IUFRO-J を通じ公募中であるが、出来る限り大会当時の状況に

即応したテーマを選定することが望まれるが、2～3の候補テーマがあがっている。

エクスカッションについても、事務局において協議した大筋の結論にもとづいて IUFRO-J を通じ視察候補地を調査中で、これらの候補地を中心に、ワーキンググループを編成して、コースの設定、手順などを進める予定であるが、この種の大国際会議を成功裡に幕を閉じるか否かは、同時通訳の質、会場の選定、広報準備活動、支出予算などに綿密な計画と運営がなされなければならないが、その第1歩を踏み出したといえよう。

なお、協議会は、関係官庁、民間等幅広く各界の代表をもって構成される必要がある、IUFRO-J 代表もこれに加わる予定である。

ホスト国としての受入れ窓口としては、林野庁がこれに当たり、林野庁内に組織委員会が作られた。実際の大会の運営には、IUFRO-J メンバーの活動に待たねばならない。とくに、各種研究会、エクスカッションでの活躍の場が広いので、逐次体制を固めつつ具体的な準備に入らなければならない。

— 第17回日本大会長期タイムスケジュール —

1977

☆大会運営基本方針の決定(第1次)

(日本大会のアウトライナー会期、開催地、会場、シンボルテーマ)。

— IUFRO 理事会(カナダ10月)へつなく。

1978

○第1回大会公告(会期、開催地、シンボルテーマなど)。

☆第2次大会運営案(大会プログラム、EXC. の概要など)。

— IUFRO 理事会へつなく。

1979

○第2回大会公告(会期、開催地、シンボルテーマなど)。

☆第3次大会運営案(プログラム、EXC. の詳細)。

— IUFRO 理事会へつなく。

1980

○第3回大会公告(インフォメーション発送)

☆大会運営方法(大会運営の詳細)

— IUFRO 理事会へつなく。

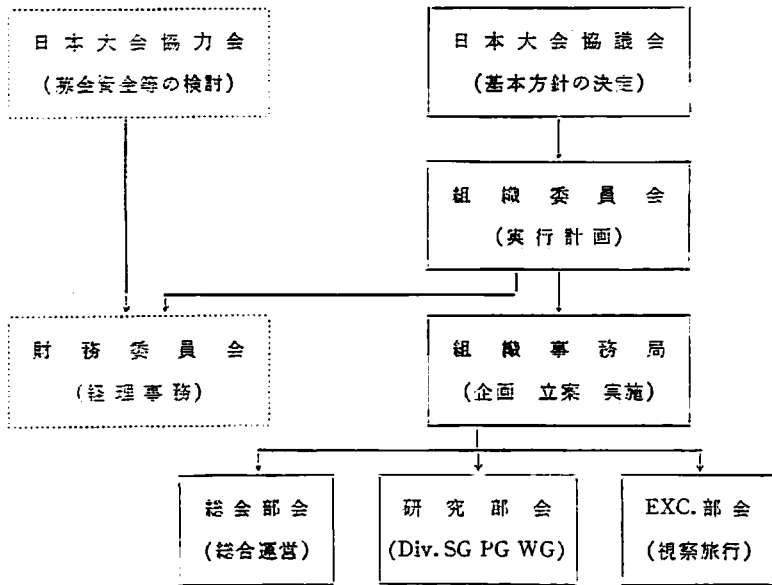
=参加申込の受付開始=

1981

大会開催—総会、各研究会、EXC.

理事会・評議委員会の開催

日本大会
準備・運営体制



INFORMATION

★ワーキンググループの開催 (第2回)

52, 4, 13 日本大会の準備体制 (組織、メンバー等) について、林野庁、林試のワーキンググループにより協議検討を行った。

★日本大会開催までの手順打合せ

52, 5, 4 林野庁、林試の関係者をもって日本大会開催までの長期スケジュール、体制作りのための手順などについて協議を行った。

★IUFRO-林試の開催

52, 5, 18 林試の各部代表者からなる委員によって、最近の IUFRO に関する情報交換、日本大会の対応とくに林試等研究者の役割について意見交換を行った。

★林野庁検討会の開催

52, 6, 10 林野庁幹部会において組織委員会、同事務局の設置、日本大会運営のため体制等について協議、検討された。

★組織委員会等の設置

52, 6, 27 林野庁幹部会において、かねてから検討されていた組織委員会および同事務局の設置発足が決定され、7月6日付け長官名でそれぞれ関係部課に通知された。

★林団懇に協力依頼

52, 7, 17 林業団体連絡懇談会に日本大会の開催について、協力方の依頼要請を行った。

★第4回 IUFRO-J 幹事会

52, 7, 29 林試において第4回幹事会を行い会期、

開催地、会場、シンボルテーマ、EXC. 等について協議 (後述) さらにJとしても年次計画をたてた会費の型で募金措置をとることが決定した。

★林団懇海外部会打合せ

52, 8, 2 上記の要請をうけた林団懇は海外部会メンバーをもって、協力の仕方、対応等について打合せが行われた。

★林業協会長に協力要請

52, 8, 18 林野庁長官は林業協会長にたいし、日本大会開催について協力方を文書をもって依頼要請した

★事務局会議開催 (第1回)

52, 8, 23 林野庁において第1回の組織委員会事務局会議が開催され、日本大会の開催地、会場、会期、時期、EXC.、シンボルテーマ、予算等について協議し、事務局案が決定した。

★組織委員会開催 (第1回)

52, 8, 26 林野庁において第1回組織委員会が開催され、事務局提案(前述)問題について協議決定された。とくに予算案に対する資金の調達方法、見込等について論議が活発にかわされた。

★林団懇において協力会等を協議

52, 8, 31 林団懇において、組織委員会の検討協議を説明し、日本大会の協力方法等について協議が行われた。

IUFRO-J NEWS No. 3

昭和52年10月

編集発行 農林省林業試験場調査部

TEL 03-711-5171